町人の文化と新しい学問

江戸時代の町人の文化と新しい学問は、どのように生まれたか

背景：平和な世の中が続き、商業が発達して、大阪・江戸の町人が経済力をつける

町人の文化が栄える

歌舞伎・人形浄瑠璃

近松門左衛門が脚本を書き、
多くの人が楽しんで見る

浮世絵

版画で多く刷られ、
人々が買い求める
（歌川広重・葛飾北斎など）

人々の楽しみと学び

・旅行や祭りを楽しむ人がふえる
・寺子屋で、読み・書き・そろばんを学ぶ子どもがふえる
・本が多く出版され、読まれる

新しい学問がおこる

国学

本居宣長が『古事記』などの古典を研究し、
仏教や儒教が伝わる前の
日本人の考え方を明らかにしようとする

蘭学

杉田玄白らがオランダ語の医学書を訳し、
『解体新書』を出す（1774年）
伊能忠敬が全国を歩いて測量し、正確な日本地図をつくる

国学や蘭学は、人々が社会のしくみや世界について考え直すきっかけにもなった。

浮世絵・歌舞伎の絵や人物の姿は描いていない（作品を複製しない）。人名は教科書で一般的な例。